

生徒一人一人の学習状況を

的確に把握する評価方法の研究Ⅱ

～「話すこと」「書くこと」の学習指導の工夫を通して～

附属函館中学校 福留志織 宮野 健

I はじめに

学習指導要領第1章総則において、生徒の「生きる力」をはぐくむことを目指し、創意を生かした特色ある教育活動を展開する中で、基礎・基本的知識・技能をはぐくむとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い個性を生かす教育の充実に努めなければならないということが示されている。またその際、生徒の発達段階を考慮しながら、生徒の言語活動の充実に努めるとともに、家庭との連携を図りながら生徒の学習習慣が確立するよう配慮しなければならないとされている。また、OECDのPISA調査等の結果分析より、思考力・判断力・表現力等を問う読解力や記述問題、知識・技能を活用する問題において課題があるとされ、その打開策を求めていくことが社会的にも急務の問題と認識されて久しい。生徒の学習意欲の観点からの先行研究においては、Reeve(1999)によると、生徒の学習活動に対する適正且つ即時的な評価は学習意欲を高め、また自ら学習を深めようとする内発的学習意欲を高める効果をもつとされている。このことから、様々な学習活動を進めていく中で、生徒にいかに適正な評価を下し、またそれと同時に学習活動と連動したサポート体制により、生徒に効果的なフィードバックをどのようにして与えていくかが今後PISA調査等で指摘されている部分でもある既習の知識を生かしながら主体的に思考・判断・表現していく力の育成、また学習指導要領で示されている「生きる力」すなわち、生涯にわたって学習を進めていくことができる自律的な学習者を育成するための大きなカギとなるものと考えられる。

本外国語科では、本年度の研究主題である「言語活動を通じた思考力・判断力・表現力の評価についての組織的な取組」を受け、以上の事柄を鑑みながら研究を進めていく。

II 研究の経過

本校は国立教育政策研究所より学習評価に関する研究指定校として、平成23年度には「学習指導要領に定められた目標等の実現状況を把握するための評価方法の研究開発」という研究主題のもと研究を推進してきた。外国語科ではそれを受け、「生徒一人一人の学習状況を的確に把握する評価方法の研究Ⅰ」として、特に「話すこと」「書くこと」の学習指導の工夫及び評価方法の研究を推進してきた。具体的には生徒の発達段階を考慮しながら、生徒の言語活動の充実に努めるべく各学年の年間指導計画を見直し、発信型の活動を配置

するようにした。また、その活動の結果を教師の授業改善に生かすべく、的確に状況把握するための工夫や、生徒が各々の学習活動における目標を確実に把握できるよう、また生徒がそれぞれの到達度に関する情報を速やかに得られるような評価方法の開発に努めた。

具体的な実践内容を述べると、話すことに関しては主に定期的なスピーチ・ディベートの活動の導入、書くことに関しては主に物語や説明文のリテリングなどの活動を導入した。

また、それぞれの活動に対して導入・研究された評価方法は、スピーチ・ディベートに関してはJTE、ALTによる複数評価者によるルーブリックを用いた短期的な評価を、リテリングに関してはポートフォリオによって学習者の変化を見ながら評価を行う長期的な評価の研究がなされた。これらの実践の効果と課題については、まず「話すこと」に関する研、スピーチ・ディベートの活動の実践における効果に関してだが、ティームティーチングで常に共通のルーブリックを用い、共通理解をより意識し学習活動を進めたことにより、授業中、個々の生徒に対し、学習目標に到達させるための望ましいよりきめ細かい支援を施すことができた。また共通理解の中、明確なルーブリックを評価方法を取り入れたことにより、評価の妥当性・信頼性を向上させることができた。さらには生徒の学習活動における到達度に関する情報をJTE、ALTより生徒に即時的に示すことができた事で生徒の目的意識も高まり、学習意欲の面でも望ましい効果を得ることができた。課題として、この研究実践によって知りえた効果を日常の学習活動においても活用し享受していくためには、ルーブリックの簡略化や生徒の活動の見取りにかかる時間を省略化していかなければならない事、また評価をいかに評定へ導くかなどが今後の研究課題になっていくものと考えられた。「書くこと」に関する研究であるリテリングにおいてはポートフォリオによる評価の効果として、「話すこと」で挙げられた点と類似し、ペーパーテストの結果のみでは知らない生徒個々の到達状況や問題点をより具体的に把握することができ、またそれによってよりきめ細かい指導を生徒一人一人に施すことができた。課題としては、一冊ずつのポートフォリオの分析にかかる時間的なコスト面の如何、効果的な評価の時期、またそれら収集された断片的データに基づいた形成的評価をいかにして総括的評価、さらには評定へと導くかなどのが挙げられた。

Ⅲ 本年度の研究および教科研究仮説

本校は平成23年度に引き続き、本年度も「学習評価に関する研究指定校」として研究を推進している。そして本年度は「言語活動を通じた思考力・判断力・表現力の評価についての組織的な取組」を研究主題としていることは前述のとおりである。ここで本校生徒の英語学習における状況を見てみる。本年度4月に実施されたCRT学力検査結果によると、基本的知識については比較的定着している生徒が多く存在しているものの、それらの知識を活用して自己の意見を構築・表明していくという「発信力」に関わる部分に関して、やや消極的である傾向がみられることが判明した。このような傾向を見てみると、英語学習において三森（2011：13）の述べるどころの言語力を支える言語技術つまり、話したり書いたりするためのスキルの更なる育成が本校生徒には必要なのではないかと考える。さらに三森によると、この言語技術、話したり書いたりするためのスキルを高めるためには「本や新聞などから得られた情報をうのみにせず、その情報から読み取った事実について、理

論的・分析的・多角的・批判的に考えることが必要である」としている。また達川（2012）では論理的な思考力の育成の最終のゴールは「まとまりのある英語の文章（談話）を理解し、英語で表現する力を育てること」とし、具体的には「英語で書かれたり、話されたりする情報、事実や課題の背景や原因・理由をしっかりと考えてみること」そして「相手が理解できるように筋道を立ててわかりやすい英語で表現することが論理的思考力を育てることになる」としている。また学習意欲の側面から Reeve(1999)が指摘するところの評価とそのフィードバックの在り方の重要性も鑑み、本研究では生徒のもつ英語学習における思考力・判断力・表現力の育成を昨年度に引き続き「発信力」に関わる部分つまり、「話すこと・書くこと」の活動を中心に、生徒のさらなる学習意欲の向上、また自律学習への素地の育成の礎となる評定に連結していく学習活動と評価の体系的な構成の在り方についての研究に重きを置き以下のように研究仮説を設定し研究を進めていくものとする。

教科研究仮説

「話すこと」「書くこと」の学習指導を工夫し、その指導と一体となる評価方法を研究することにより、生徒一人一人の学習状況を的確に把握することができる。

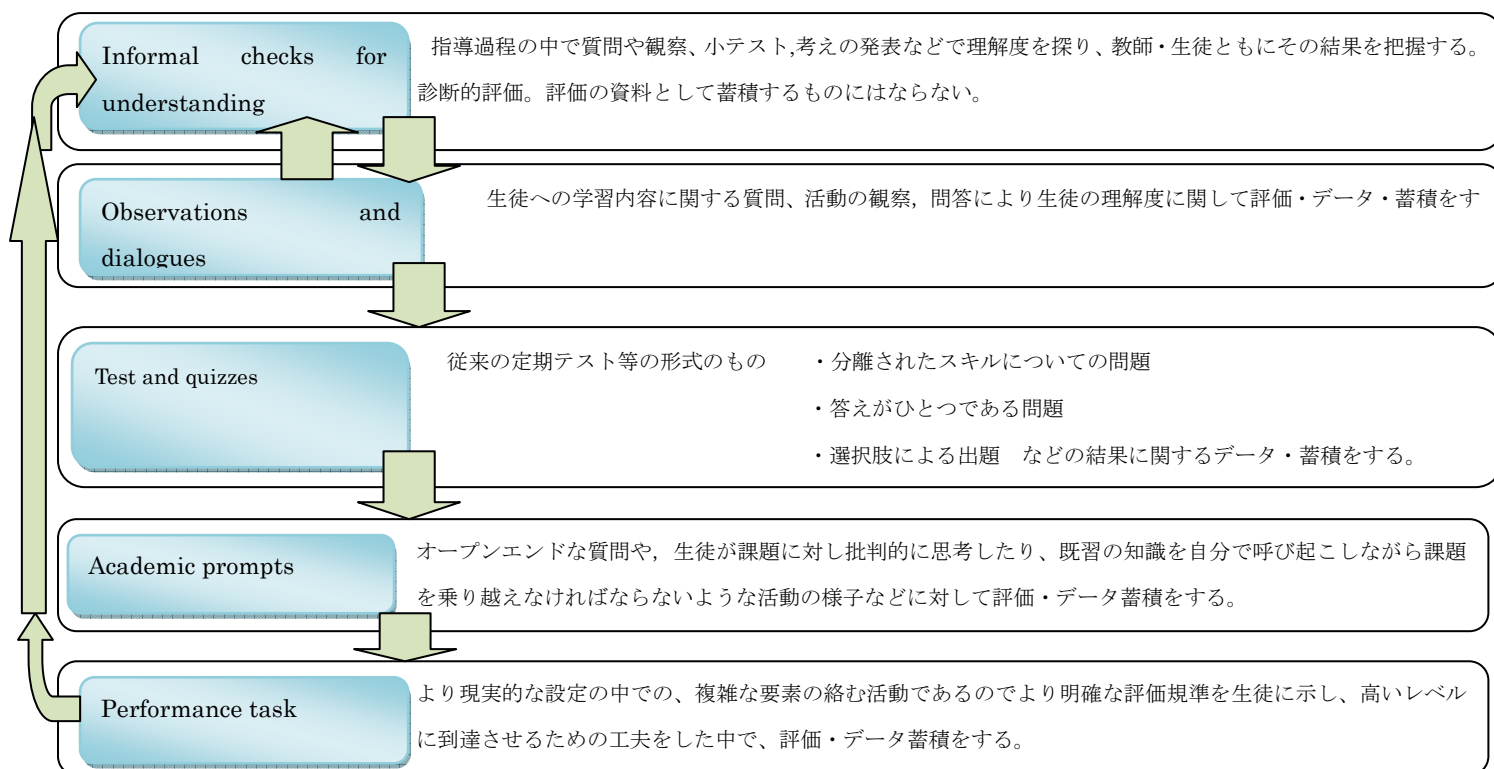
IV 研究仮説に基づく実践例

1. 指導と評価の一体化を視野に入れた、学習活動及び評価計画の構成の工夫

学習指導要領において「生きる力」をはぐくむ事が基本理念として示され、また「知識や技術の習得とともに、思考力・判断力・表現力の育成」に重きを置いた指導を展開することの重要性が示されている。前述のように本校生徒の多くは、英語学習において基本的知識はおおかた身につけることができているものの、それらを用い思考し、判断し、表現していく言語力を支える言語技術の育成の面において何らかの手立てを講じられなければならない。また、昨年度の研究結果からは、妥当性・信頼性の高い評価を個々の生徒に対して効率的に行っていくための工夫、それらの情報を学習意欲の向上、自律的学習のための素地の育成のために生徒個々に即時的にフィードバックしつつ評定へと導いていく必要があるという事が示された。そこで本研究では、まず学習活動および評価計画を構成していく段階で Grant and Jay (2005)が示す A Continuum of Assessment（評価の連続体）の理論及び枠組みを援用することとした。この理論では、様々な様式や手段を工夫しながら学習評価を進め、多角的な視点から蓄積されたデータにより、生徒の成長の様子をとらえていくことが、評価の妥当性・信頼性を高めていく上で重要なことであるのは周知の事であるが、それらの活動をより効率よく展開していくために、それぞれの活動の役割の関連性を考慮に入れ、“informal checks for understanding, observations and dialogs, test and quizzes, academic prompts, performance tasks” などの一連のサイクル（連続体）の中で進めていくことが重要であるとしている。これはすでによく知られた「PDCA サイクル」や「逆向き設計理論」関連する理論である。具体的な A Continuum of Assessment の構成については図 1 に示す。実践事例 1 では、この理論の枠組みに則り構成し試行した「話すこと」「書くこと」中心の活動の様子、用いた評価方法、また生徒の変容そして成果と課題について論じていく。実践事例 2 では同じく A Continuum of Assessment の枠組みを用い

た活動から評定への連結の試行とその結果について述べる。

図1 A Continuum of Assessment (Grant and Jay, 2005)



2 実践事例 1

(1) 題材名

『Unit 4 Home stay in the United States』

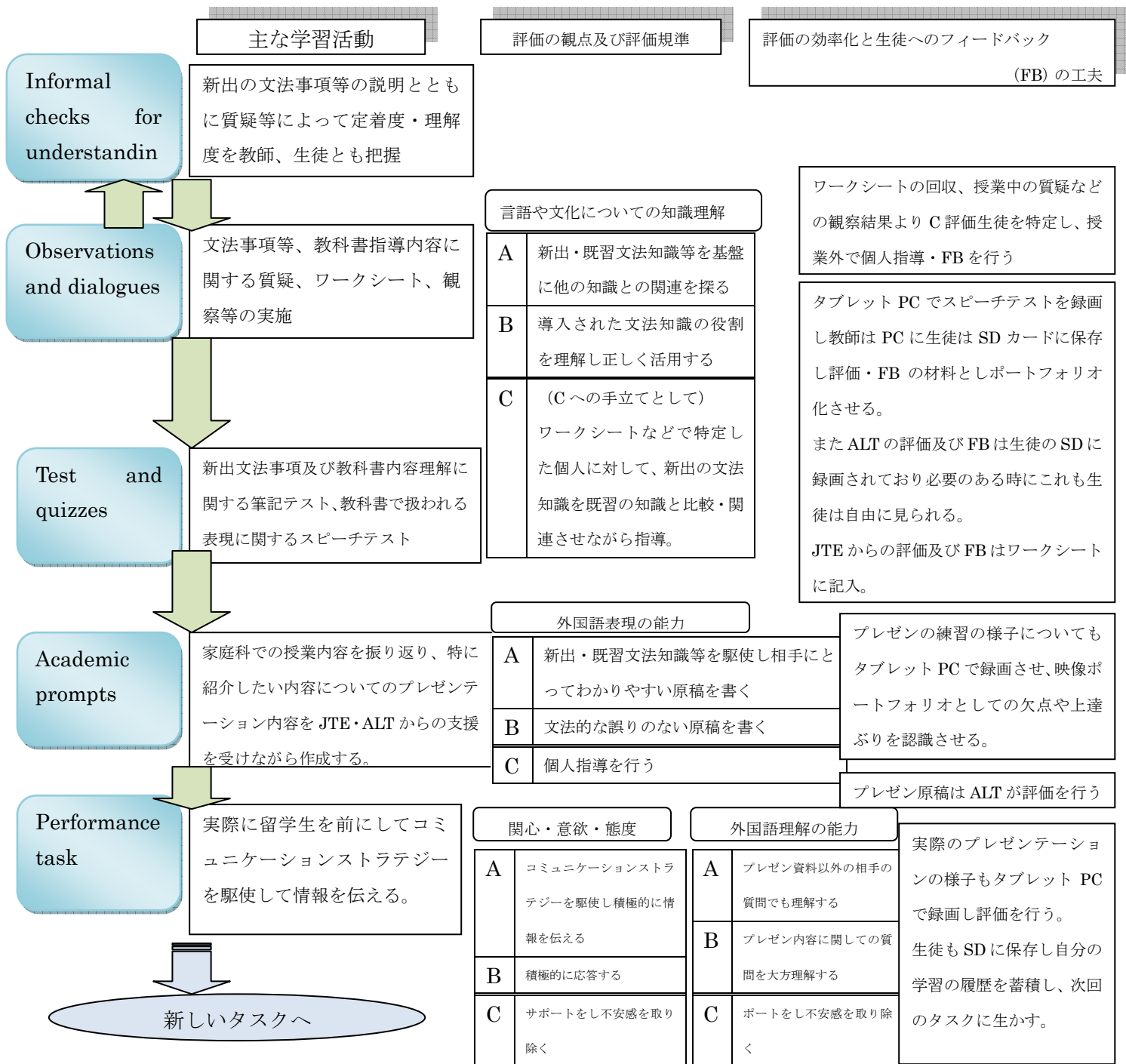
(2) 実践の概要

この Unit で学ぶ主な新出の文法事項は **have to**・**will**・**must** 等である。また教科書本文では主人公はホームステイの経験等を通して、文化の違いなど解釈し、自分の苦情や悩みを表現したり、生活様式の差異等について説明するという経験を経てコミュニケーションの大切さ等を学んでいくという流れになっている。そこで本実践では教科書内容の発展的内容として生徒により現実的な状況で文化の差異に関する気付きという文脈において既習事項を活用させるべく、北海道教育大学函館校、上山先生及び国際交流・協力センターに御協力いただき、留学生に來校してもらい、日本文化に関するプレゼンテーションを生徒に行わせるという活動を実施した。プレゼンテーションの主な内容としては、本校ではこの時期（7月初旬）に生徒たちが家庭科において着物文化について学ぶ経験をしていることから、Unit4 に関する学習の終了後、この家庭科で学んだ内容の中から自分が是非に紹介したい内容を決めさせた。さらにそれを伝えるために必要な自分の英語の既習知識を呼び起こすことを生徒に促しながら、事前に発表の構成や原稿を考えさせた。

(3) 事前指導段階から評価までの A Continuum of Assessment の枠組みを用いた活動の構成

プレゼンテーションのための前段階指導から実際のプレゼンテーションまでの活動の構成及び評価の効率化等の工夫は A Continuum of Assessment の枠組みを用い、図 2 に示すこととする。

図2 事前指導段階から評価までの A Continuum of Assessment の枠組みを用いた活動の構成



(4) 実践事例 1 の実際

① A Continuum of Assessment の枠組みを援用した効果

生徒の理解力というもの過去の知識の呼び起こしを繰り返しながら日々発展し、伸張していくものである。従って従来の単一の筆記テスト等の実施のみでは妥当性・信頼性の高い評価をすることはできない。しかしながら、様々な学習活動のなかで収集された断片的な膨大なデータによる形成的評価を元に同時進行で総括的評価を実施していくことは煩雑すぎて現実的ではない。実践事例 1 においては A Continuum of Assessment の枠組みを援用した事により、生徒の発達段階や活動の特性、次のタスクへの体系的かつ有機的つながり等を考慮しながら、生徒の言語活動の充実を目的と

3. 実践事例 2

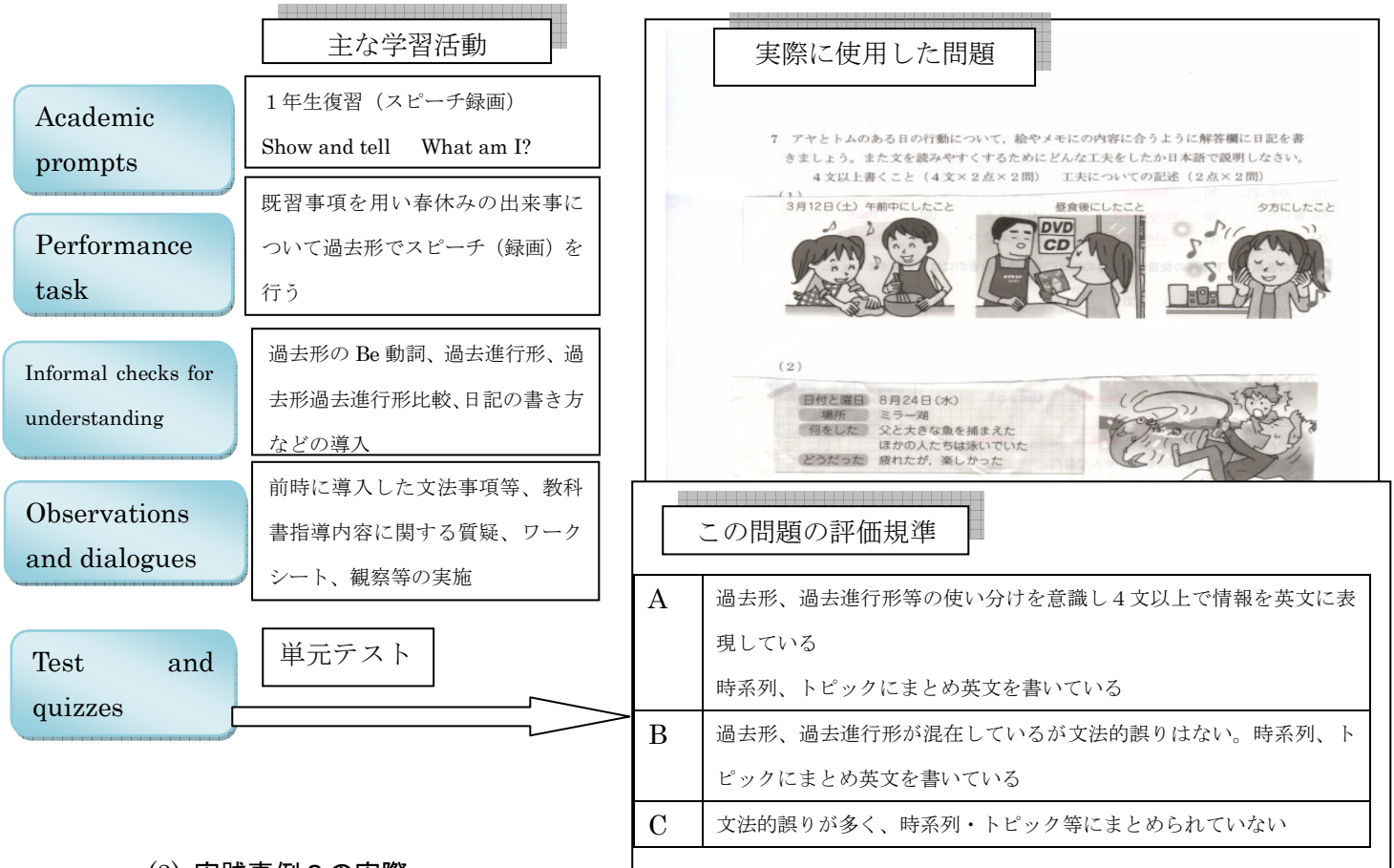
(1) 「思考力・判断力・表現力」を問う単元テストの実施

実践事例 2 では、思考力・判断力・表現力の育成、生徒のさらなる学習意欲の向上、また自律学習への素地の育成の礎となる評定に連結していく学習活動と評価の体系的な構成の在り方の探究を念頭に置き、教科書 Unit1～Writing plus1、そして単元テストまでの学習活動の流れをその内容的な関連性を意識しながら構成した。単元テストにおいては思考力・判断力・表現力を問う設問を設定し、生徒が既習知識を引き出し活用しながら解答する姿が捕らえられたのか、また単元テストまでの流れに関連性・整合性をもたせることが生徒の点数に影響があるのかを検証した。まず図 3 により単元テストまでの流れを示す。

(2) 実践の概要

具体的にこの設問において生徒達は、与えられた情報（この場合日本語）を読み手の立場に立ってわかりやすくまとめ（思考・判断）し、英語で日記の形式で作文（表現）することが求められる。過去形・過去進行形等の既習知識や、ALT との現実的な設定の中で行ったスピーチテストの経験、生徒が書いた英作文への JTE, ALT からのフィードバックを思い起こすことが正答へのカギとなる。

図 3 A continuum of Assessment の枠組みを援用した単元テストまでの流れ



(3) 実践事例 2 の実際

① 単元テストにおける総括的評価及び評定への連結の可能性

実践事例 2 の単元テストにおいて、生徒が思考・判断し既習知識を引き出し活用しながら表現し解答する姿をとらえることができたかという問いについては、今回に限り大

方成果はあったと考える。しかしながら、やはり筆記テストは静止画に対する評価であるのですべてをとらえることとはならないと考える。今回の実践に関して述べると、単元テストまでの流れを一連の枠組みを援用し様々な活動を配列したことが、生徒に知識の有機的な連結を可能にし、紙上の答案でも答えに到達するまでの生徒の姿をとらえやすくしたのではないかと考える。

②点数の変動について

4月当初に実施していた「春休みの出来事について説明する」という内容の設問の平均点と今回の単元テストでの設問の平均点を比較してみたが、有意な差は見受けられなかった(マン・ホイットニーU検定)。テストの形式も異なり、目的も異なるので単純にこれら二つのテスト結果について比較はできないものの、今回は低学力層の生徒の得点を見ると、平均点は若干だが向上していた。このことは日常の学習活動の構成や配置に有機的な連結をもたせフィードバックの得られやすい環境を常に意識し構築することが低学力層生徒にとって有益な学習支援となっていくという示唆をとらえる。

V 仮説の検証

今回、実践事例1・2ではA Continuum of Assessment (Grant and Jay, 2005)を援用し「書くこと、話すこと」の学習指導を工夫し、また指導と評価が一体化するよう評価方法を研究した。生徒の発達段階を考慮にいれた一連のこの枠組みを学習の流れを構築する際取り入れた事により、ICT技術の導入も相まって効率的にまた細やかに生徒の状況を把握することを可能としたと考える。

VI 成果と課題

成果としては、生徒の発達段階や活動内容の有機的なつながりを考えながら活動の配列をすることが個々の生徒に意味深いフィードバックをもたらし自己の既習知識へのアクセスを容易にし、学習意欲の向上につながり、自律学習の素地の育成の面においても有益な影響をもたらすことが分かった。またICT技術の導入の工夫の如何に膨大な生徒の成長の横顔をとらえる効率的且つ有効的な評価情報収集、生徒へのフィードバックをもたらし可能性があり、指導と評価が一体となった個に応じた指導を可能にする鍵ある事が示された。課題としては日常的な授業の中でも妥当性・信頼性を保証する評価規準の補完に足りうる事例の収集・検討が今後も継続して必要であり、そのための作業の効率化の努力や方法の開発は継続されていくべきということがあげられる。

VII おわりに

生徒の学習活動に対する適正且つ即時的な評価は学習意欲を高め、また自ら学習を深めようとする内発的学習意欲を高める効果をもつ事を教師の多くは経験的に知っている。特に学習を不得意とする生徒には有効なフィードバックと連動した温かいサポート体制が必要である。その大切な心の通った指導時間を確保するべく今後とも学習活動と評価の体系的な構成の在り方についての研究を継続していきたい。(文責 福留志織)

<参考文献>

- ・中学校学習指導要領解説外国語編(平成20年9月)文部科学省
- ・Johnmarshall Reeve (1999). Autonomy-Supportive Teacher: How They Teach and Motive Students. Journal of Educational Psychology 1999, vol.91. No.3, 537-548
- ・達川奎三『英語教育における思考力の伸長と表現力のあり方-中学校・高等学校の英語教育の改善と充実に向けて-』(2012) 広島外国語研究 no.15 1-19 広島大学外国語研究センター
- ・三森ゆりか「グローバル時代を生き抜くためのスキルとは一言語技術教育の重要性」『STEP 英語情報 7・8月号』(2011) 11-15
- ・Wiggins, G. and Mc Tighe, J., Understanding by Design Expanded 2nd Edition, ASCD (2005) p.152-153.

